みんなで

のりこえよう通信

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　校長室から

令和　2　年　6月　29日　　NO.17

手紙

　学校の様々な対応にご理解ご協力いただいています。本当に感謝申し上げます。その様々な対応をしていくなかで、メ－ルというツ－ルを何度も活用させていただきました。緊急事案をお知らせするには、画期的な便利さで２１世紀のすごさを感じました。

　ところが、そんな混乱の中、蟄居生活が続いていたので、することもなくぼんやり過ごすものいかがなものかと、部屋の大掃除をはじめたのです。

　母親宅に昔使っていて今は物置と化している部屋の整理にかかったのです。転勤のときにまとめたままのダンボ－ルが出てきたり、なぜか学生時代の成績書が出てきたり、なかなか掃除は進みません。ある箱を開けると、卒業生がその卒業式の時にくれた手紙や写真があふれ出てきて、そこに映る私の若いこと。年賀状の束も出てきてびっくり。

　そのなかに、ある手紙を見つけたのでした。

　手紙の恐ろしいのは、「肉筆」であること。文字の形でその人が思い出されたり、手紙をもらったその瞬間に時間が飛びます。「懐かしい」の連続で結局、物置は箱の位置が変わっただけの物置のまま。メールの便利さと手紙の肉筆の迫力に圧倒された時間でした。

と、学校だよりには書きましたが、もう少し突っ込んでみますと‥。

　年賀状や手紙類が入った箱の中には、鬼籍に入った人からの手紙やハガキもたくさん出てきたのです。

仲人をしてもらったおじさんの細筆で書かれた文字や亡くなった卒業生の細いけれど勢いのある文字。恩師の意外と子どもぽいけれど圧力を感じる漢字が並んでいたり、大正生まれの義理の祖母の達筆や陸上部の先輩の理科系学生らしい几帳面な文字。大正時代に青春を送った、学生時代４年間お世話になった下宿の大家さんの解読が難しい崩し字など。

肉筆の暖かさは涙を誘いました。時間はどんどん進んでいきます。今の一瞬を悔いなく生きることが一番大切なんだと、それらの肉筆の文字は訴えているようです。